# カニバリズムなミカの近況

雄スカ猫

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

## 注意事項



【作品タイトル】
カニバリズムなミカの近況

【Ｎコード】
Ｎ１３９９ＫＸ

【作者名】
雄スカ猫

【あらすじ】
クリトリスや乳首を食料として食べる性癖に目覚めたレズビアンな女性達とスカトロ大好きミカさんのＨでグロいカニバリズムとスカトロが合わさったお話。
になる予定。

# 第1話（前書き）

カニバリズムやスカトロのお話がメインになりそうです。

別ストーリーのミカさんが看護師として活躍する予定。

# 第1話

私はミカ。かつて、食糞の魅力に取りつかれ、日常生活も送れないほどに、うんちの美味しさに取り憑かれ、うんちに依存していた私。そんな私を救ってくれたのはとあるクリニックでした。私はそこで救われ、同じようにアブノーマルな性癖で苦しむ女性たちのために、私は看護師の道に進みました。そして、看護師の資格をとった今、看護師として働くために、かつてのクリニックを朝早くに訪れたのでした。

クリニックに入ると相変わらずのうんちのいい香りが漂ってきました。そして、入口の近くでうんちまみれのお尻を丸出しにしたナース服を着て掃除をしている吉野さんに声をかけたのでした。

「お久しぶりです。吉野さん。」

「あら、ミカさん。久しぶり。一段と綺麗になったわね　。看護師試験合格おめでとう。そういえば今日からだったわね？ミカさんの指導は私がすることになってるわ　。」

「はい、今日からここで働かせてもらうことになりました。また、よろしくお願いします。」

「よろしくね　。ミカさん　。そういえば、このクリニックの決まりは覚えてるかしら　？」

「はい　。ちゃんと入浴禁止しておまんことアナルを臭くなるように汚してきました。今日までノーパンのまま４日間うんち我慢しな

がら、おまんこにバイブ入れてここまできました　。」

「さすがね　。そしたら、こっちに来てお尻をむき出しにして突き出して　？ユニフォームを渡す前にアナルの臭いと汚れ具合を確認するために味見するわね　。」

そう言われた私は、かつてこのクリニックに来た時よりも際どいミニスカートをめくりあげ、臭くて汚いお尻を吉野さんに向けて突き出しました。吉野さんはうんち臭いアナルの臭いを嗅いで、いい臭いと褒めながらジュルジュルとアナルを舐め、私のうんちを食べたいと言ってくれるのでした。

「スンスン。は〜　。相変わらず、大きいのに形が良くて美味しそうなお尻　。うんちの美味しそうないい臭いがすごくするわね　。ジュルジュル。うんちの味がして美味しい　。ね〜、ミカさん、私今日何も食べてないの。結構お腹がすいてるのだけど、お願いできるかしら　？」

「はい　。吉野さん　。お尻もっと突き出しますね　。口受けですか　？」

「お願いね　。あむ。いふへもいいはほ　？」

「はい。じゃー出しますね　。ブー。ブリブリブリ。」

相変わらず、私は大食女なので、出るうんちも大量です。吉野さんはそれをこぼすことなく全てを美味しそうに食べてくれたのでした。

「ん〜　。モニュモニュゴクン。モニュモニュゴクン。モニュモニュゴックン。美味しいうんちだったわ　？相変わらずいっぱい出る

わね　。美味しかったわ　。ご馳走様　。じゃー、ロッカーに行きましょう。ユニフォームを渡すわね。来て　。」

そう言って、私は吉野さんのもとへ行くと、吉野さんは私の方に向けてうんちがべっとり着いたお尻を突き出してくれました。「ミカさんも朝食まだだったらどう　？」そう言って、私をしゃがませると、口にアナルを押し付けて、極太のバナナうんちを食べさせてくれたのでした。

「ミカさん、いっぱい出すけどいい　？」

「はい。お腹ぺこぺこだったんです　。」

「じゃー、口大きく開けててね　。ブー。ブリブリブリブリ。」

「ん〜　。モニュモニュゴクン。モニュモニュゴックン。吉野さんのうんち相変わらず、美味しい　。」

「良かった　。アナル綺麗に舐め終わったら、立ち上がって　？一緒に更衣室行きましょう　。」

吉野さんの極太うんちを美味しく食べ終わり、立ち上がって吉野さんの隣に並びました。吉野さんは私のアナルに指を入れて、懐かしいアナルクチュクチュをしながら更衣室へと案内してくれたのでした。

更衣室へ着くと、クチュクチュとアナルを刺激していた指を抜き、舐めしゃぶりながら、私にユニフォームを手渡しました。そして、私の汚れた服を脱がし、おまんことアナルを舐めしゃぶり、ドロドロにするとユニフォームを着せてくれたのでした。

「ユニフォームを着る時は、アナルもおまんこもめいっぱいドロドロにしておくの。そうすると、患者さんは私たちのおまんこやアナルをいつでも美味しく舐めることができるのよ？だから、明日からは先輩や同期にいっぱい舐めて貰っていっぱい汚してからユニフォームに着替えてね　？」

そう言って、私のお尻丸出しノユニフォームを整えると、今日の予定を教えてくれたのでした。

「ミカさんには、クリトリス切断プレイ依存になった女性のクリトリス切断術と再生処置、切断したクリトリスの品質検査の見学と実践を行ってもらおうと思います。」

「クリトリス切断依存ですか？」

「そう。あなたも知ってるでしょ？今、巷のレズビアンの間ではクリトリスを切断するプレイが流行しているの。そして、切断したクリトリスをクリナオール軟膏で再生させては切断してを繰り返して、切断したクリトリスを食べあっているの。そういうプレイに依存しすぎて、日常生活に支障をきたしている人が増えているの。」

「そうだったんですね。確かにクリトリスは最近食品としても裏では流通してますし、すごく美味しいですからね。包丁で切ってお刺身にして食べるのもいいですし、ナイフとフォークで切って少し鉄板で焼いて食べるのも美味しいですし、クンニしながら噛み切るのも美味しいですし、どんな食べ方しても最高におまんこが濡れちゃうくらい美味しいですよね　。」

「ふふ　。あなたも相当クリトリス好きなのね　。私も美味しくて

よく食べてるわ　。今度あなたのクリトリス食べてもいいかしら？私のも食べていいからね　？私はナイフで切ってフォークで食べられてるとこ見ると興奮しちゃうわ　。」

「はい　。今度、一緒に食べ合いましょう　。でも、クリトリス切断プレイは気持ちいいし、食べても美味しいから、永遠としたいくらいですが、そんなに大変な患者さんがいるんですか？」

「えー。クリトリスの切断プレイは確かにとてつもない快感を得られるし、切断したクリトリスも食材として美味しく食べられることは世間のレズビアン女性には知られているのだけど、日常生活を送れなくなるほどだと逆に辛くなってしまうわ。クリトリスを切断しても快感を得られないし、パートナーのクリトリスを食べても、美味しいって感じられなくなってしまうの。だから、ミカさんにはそういった辛い思いをしている女性のクリトリスを切断して、美味しいっていいながら食べてあげて欲しいの。」

「わかりました。私もその患者さんのクリトリスをエッチに切断して、美味しく食べてあげたいです。おなかいっぱい食べちゃいますね　。」

「お願いね　。じゃー、ついて来て？その患者さんのところに行きましょう　。」

「はい　。」

最近のレズビアン女性たちはスカトロだけでは満足できず、クリトリスや乳首を切断しては食べるプレイが流行しているようです。私も看護実習で何人ものクリトリスを切断し、食べてきたのでクリトリスの美味しい食べ方は極めています。

吉野さんからその話を聞いた時にグーっとお腹がなってしまったのですが、バレてないか焦りました。これから患者さんのおしっこやうんちだけでなく、乳首やクリトリスをおなかいっぱい食べられると思うだけで、私のおまんこが疼くのでした。

吉野さんに案内された処置室には2人の巨尻美女がいました。全裸でおまんことアナル用のディルドが取り付けられた椅子に座り、おまんことアナルにディルドを挿入しながら、自分のクリトリスを切断しては軟膏を塗って、再生させ、切断しては再生させて、それぞれが座っている椅子のそばにあるテーブルの上のお皿には300g相当のクリトリスが載せられていました。2人分合わせると600gぐらいでしょうか。美味しそうないい匂いがしています。お腹がなる音が響き、吉野さんにバレて笑われるのでした。

クリトリスを再生させるクリナオール軟膏は、おまんこや乳首を秒単位で瞬時に再生させることができる画期的な軟膏で、一部のレズビアンのためのレストランではクリトリスをふんだんに使った料理店が存在します。私も行ったことがありますが、美味しすぎて、今では行きつけです。そこでは大量のクリトリスが必要となるため、クリトリス切断フェチな多くの女性がクリトリスを提供しているそうです。この2人の女性もゆくゆくはそう言ったレストランで働けるように、依存症を克服して欲しいなと思うのでした。

## 第1話（後書き）

ストックとかはないので、更新は不規則ですが、好きな人いるのだろうか。

# 第2話（前書き）

カニバ〜

# 第2話

私はディルド付きの椅子で一生懸命におまんことアナルをズボズボして、セルフクリ切断オナニーをしているう2人の元へ近ずいて行きました。
私の右に座っているのはさくやさんで、左に座ってるのはかなこさんです。私は2人の椅子の近くにあるテーブルの上にのったお皿から、切り取られたクリトリスをつまみ取り、口に入れました。
プリプリの食感にクリトリスのツルツルの舌触りで、おまんこのいやらしいエッチな香りが食欲をそそり、無意識にいくつも食べてしまいました。

後ろで吉野さんが、咳払いをしながら私に近づき、私のアナルに指入れし、ズボズボしながら、「食べ過ぎよ。私の分も残しておいて。後で一緒に食べましょう。」と耳うちをして来て、我にかえるのでした。
私はさくやさんに話しかけました。
「さくやさん、辛くないの？クリトリスを何度も自分で切断するなんて、、、、。」
「いっぱい気持ちよくなりたいのに、イキたいのにイケないんです、、、、イキたいです、、、。クリトリス、クンニしながら噛みちぎって欲しいです、、、、。」
そう言いながら、涙を流しながら、クリトリスを切断し続けていました。

私はさくやさんの手を取り、切断行為をやめさせました。そして椅子から立ち上がらせ、ギュッと抱きしめて安心感を与えてあげました。優しくお尻を撫で回してアナルに手をやり、ネチャネチャとしたうんちを指ですくい取り、口へ運びました。濃厚で蕩けるような味わいに満足すると、仁王立ちにさせて、おまんこやアナルの状態を確認しました。まずはおまんこを確認するため、私の顔の前におまんこをさらけ出すように指示をしました。さくやさんはおまんこをクパァっと開き、私に見せてくれました。何度もおまんこを切って来たのもあり、おまんこは少し赤黒い色をしていて、マン汁が滴りジューシーで美味しそうにヌルヌルとしていました。本当は今にもおまんこに食いつき、クリトリスを喰いちぎりたかったのですが、実はディルドチェアから立ち上がった際に、うんちがボトンと少量出ていたのが見えたｎのと、先程味見したうんちが美味しかったため、先にうんちを食べることにしたのでした。

「さくやさん、あなたのおまんこ、すごくジューシーで美味しそうね。クリトリスも後で噛みちぎって食べてあげる　。そのために、おまんこの美味しいお汁をいっぱい出して欲しいから、まずはあなたのネットリうんちがべっとり付いたデカ尻アナルを舐めてもいいかしら?うんちの美味しそうな、いいにおいでもうお腹ペコペコ　。アナルも気持ちよくしてあげるから、私にお尻を向けて突き出して、ブリブリって美味しいうんちがいっぱい出るように踏ん張ってね　？美味しいうんち食べさせてくれる　？」

「はい、、、私の臭くて汚いお尻で良ければ、いっぱい舐めてうんち食べて欲しいです、、、。」

「さ、後ろ向いて?綺麗なデカ尻ね。スンスン　。うんちのいい匂い　。美味しそう　。そのデカくて可愛いお尻を突き出して　？」

「こ、こうですか？」

「そう　。いいわ　。むっちりしてエッチな美味しそうなお尻　。でも、もう少し突き出してね　？じゃないとアナルをいっぱい舐めれないから　。」

「はい、、、こうですか？」

「そう　。そうすればアナルが全開するわね　。偉いわ　　。もう、うんちの美味しそうないい匂いがして我慢出来ないわ　。あむ　。レロレロレロレロ。こびり付いたうんち美味しい　。アナルいっぱい刺激するから、いっぱい気持ちよくなって、美味しいうんち出してね　？レロレロレロレロ。ジュルジュルジュルジュル。」

そう言って、私はさくやさんのアナルを激しく啜りながら舐め、アナルに舌をねじ込んで、うんちを促すのでした。

「は〜、は〜、、、うんち出ちゃう、、、、出る〜〜、、、ブリブリブリブリブリ〜

。」

「レロレロレロレロ。ん！？あむ　。ん〜　。いっぱいへは　。もっほだしへ　？モニュモニュゴクン。美味しいうんちよ　。もっと出して　？レロレロレロ。ジュルジュル。」

「ん、、、なんか、、下痢もでそうです、、、」

「レロレロレロレロ。ジュルジュル。ふふ　。下痢ジュースも飲ませて　？もっと踏ん張って、アナルをヒクヒクさせて　。美味しいヒクヒクアナルを舐めさせて　？」

「あん、、あ〜、、、ブリブリブリブリ〜。」

「あ〜、もったいない。飲ませて　？ジュルジュルゴクン。ジュルジュル。ゴクン。」

そう言って、噴き出る下痢うんちを手で受け止めながらアナルから直飲みし、アナルから直飲みしたうんちを飲み干し、手に受けたうんちも飲み干して、美味しいうんちを堪能した私はマン汁でドロドロになっているおまんこを食べるため、突き出されているお尻を名残惜しく思いつつも、姿勢を直させ、私の方へおっぱいが見えるように正面を向かせると私におまんこをさらけ出すよう命じて、お楽しみのクリトリスの直喰いを始めるのでした。

美味しいクリトリスを食べるために、まずはおまんこを優しく舐めて、マン汁を啜ってあげました。

「ん〜。おまんこ可愛い。いい匂いがして美味しそうね　。アナルが気持ちよくて、いっぱいマン汁が出たのね　。マン汁飲んでもいいかしら？飲みやすいようにもっと脚開いておまんこ突き出してね　。レロレロ。ん〜　。すっごく美味しいマン汁　。レロレロ。ジュルジュル。」

「あん、気持ちいい、、、気持ちいいです、、。いっぱいおまんこ舐めてください、、、。んにゃ。」

「レロレロレロレロ。ジュルジュル。ん〜。ジュルジュル。ダメよ？気持ちよくても、腰引いちゃダメ。おまんこ舐めれなくなっちゃう。いっぱいおまんこ舐めて、もっとマン汁ドロドロにしないと、クリトリスを美味しく食べれないでしょ？ゆっくり噛みちぎって食

べてあげるから、もっとおまんこ突き出してね　？。ジュルジュル。」

「あん　。クリトリス食べて欲しいです、、、おまんこ突き出してクパァって拡げるので、、、おまんこ噛みちぎってください。」

「ジュルジュルジュルジュル。レロレロ。ん～　。偉いわ　。おまんこしっかり突き出して、自分からおまんこクパァって開いて　。美味しいマン汁が溢れてきて、クリトリスもビンビンしてきて美味しそう　。食べ頃になったわね　。もっとおまんこ突き出してクパァって開いて？」

「はい、、、、おまんこ美味しく召し上がってください、、、。」

「ありがとう　。美味しく食べるわね　。？」

そう言って、私はさくやさんのおまんこに歯をあてがい、グニグニと力を入れながら噛みつき、弾力のある肉質から溢れるマン汁で思わず嬉しくなり、「ん～　。歯ごたえが良くて美味しい　。もう少しで噛みちぎれるからね　。」と言うと、クリトリスを噛みちぎって、プリプリでツルツルしたクリトリスを咀嚼しゴクンと飲み込んで「クリトリス、、美味しいかった　。もっとおかわりしてもいい？」と滴る血を飲みながら止血し、クリナオール軟膏を塗りながら言ってあげたのでした。

## 第2話（後書き）

次回は色んなシチュエーション出クリトリスを食べるミカさんの巻。

## 第3話（前書き）

最近はなんかこっちを書いちゃいますね。

## 第3話

クリナオール軟膏を塗ることで、噛みちぎったおまんこが瞬時に再生されていきました。また、ツヤツヤでぷるぷるの美味しそうなクリトリスが目の前に現れると、私は上目遣いでさくやさんを見つめながら、再びおまんこを舐めしゃぶりました。ジュルジュルと啜るだけで美味しいマン汁が溢れる淫乱まんこをネットリと舌でなぶり、マン汁をどんどん溢れさせ、飲んでいきました。クリトリスが再びビンビンになり、食べ頃になると私はおまんこ調理用のまな板にさくやさんを跨がせました。野球のバット程の幅の板で、用途としては立たせながらおまんこを包丁やナイフで切るための特殊なまな板です。

「さくやさん、今度はこのまな板に股がってくれる?ナイフとフォークでエレガントに食べてあげたいわ　。その様子を見ながら、いっぱい興奮してマン汁出してね　?」

「はい　。おまんこ噛みちぎられて、すごく気持ちよくてイッちゃいました。すごく久しぶりで気持ちよくて、、、嬉しいです、、、、もっとイキたいです。いっぱいおまんこ食べて欲しいです　」

「あらあら　。本当に食べていいの　?じゃーいっぱいおまんこ食べてあげる　。プリプリの綺麗なクリトリスがビンビンになってすごく美味しそう　。フォークでまずは刺すわね?もっとおまんこをまな板の上で突き出してみて　?」

「はい　、、、なんかすごくドキドキします。私のおまんこいかがですか?」

「可愛いわよ　　？プリプリでいい香りがして、ジューシーなマン汁ソースがクリトリスをさらに美味しそうに煌めかせてる。さくやさん、あなたのクリトリスまた美味しく食べさせてもらうわね？、、、プス、、、、スパッ。」

「あ〜　。痛くて気持ちいい　　、、、、おしっこ出ちゃいました、、、、。」

「いいわよ　　？このまな板にはおしっこ漏らしてもちゃんと回収して、ワイングラスに溜められるようになってるの。」

そう言って、私はまな板に取り付けられたワイングラスを手に取り、マン汁とおまんこを切った際に出た血液とイキ潮が混ざった極上ワインをおまんこを咀嚼しながら、美味しく飲み干すのでした。

あまりの気持ちよさに、体をビクつかせるさくやさんに優しくクリナオール軟膏を塗った私はさくやさんを床に寝かせてあげました。そして、「さくやさんのおまんこプリプリでジューシーで美味しかったわ　。今度はこのペニナール軟膏を塗ってもいいかしら？」

「ミカさん、、それはどんな薬なんですか、、、？」

「クリトリスを再生させる際に、クリトリスをオチンチン化させる軟膏なの。もちろん、クリトリスがオチンチンになっても1回切断してクリナオール軟膏を塗れば元のクリトリスに戻るわ？このペニナール軟膏はクリトリスをオチンチン化させて、快楽を増大させるだけでなく、クリトリスの肉質を良くして美味しく食べるために開発された薬なの。オチンチン化するのに1〜2分くらいかかるから、ここで2分くらい休んでて　　？オチンチン化したらフェラしてあ

げるわ　。イッた瞬間に噛み切ってさらに気持ちよくイカせてあげるからね　。イッた瞬間のクリチンポはザーメンが溜まって美味しいのよ　。」

「本物の精液なんですか？」

「いいえ。妊娠はしないから本物ではないのだけど、色やとろみ具合、香りも味も精液みたいで美味しい汁が出るの。しかも量もいっぱい出るから、クリチンポを美味しく食べられるのよ　？」

そう言って私は再生されたクリトリスにペニナール軟膏を優しく塗り、オチンチン化するのを楽しみに待つ間に今度はかなこさんのうんちとおまんこを食べることにしたのでした。

私はディルドチェアでセルフオナニーしながらおまんこカットを繰り返しているかなこさんの元へと歩み寄りました。

「気持ちよさそうにおまんこを食べられたさくやさんを見てて、辛かったでしょ？あなたのおまんこも食べてあげるわ　。でもその前に、お尻を私に突き出してくれる？何故かわかるわよね　？」

「はい　。私の臭いアナルからいっぱいうんち出します　。」

「いい子ね　。さ、立ち上がって　。」

ディルドチェアから立ち上がったかなこさんは、嬉しそうに私に立ちバックでお尻を向けて突き出してくれました。かなこさんがアナルに入れていたディルドを見ると程よいベットリ感のうんちが付いていました。うんちの状態を確認した私は早速尻肉をかき分けアナルを剥き出しました。

アナルにはベットリとうんちがついていました。まずは香りを堪能してからアナルを舐めます。

「スンスン。あなたのアナルも美味しそうなうんちのいい臭いがするわね　。アナルにベットリついてるうんち味見するわよ？レロレロレロレロ。美味しい　。この美味しいうんちいっぱい出せる？」

「はい、、、頑張って踏ん張ります、、、、」

頑張って踏ん張ってるかなこさんのお尻が可愛くて、尻肉を優しく撫でながら甘噛みして、美味しいお尻を堪能しました。

「プー」

かなこさんのお尻からオナラと一緒にうんちがではじめました。私はオナラの香りを楽しみながら、チョコレートよりも美味しいネットリうんちスイーツをかなこさんのアナルから直食いしたのでした。

「あむ　。モニュモニュ。ゴクン。モニュモニュゴクン。美味しい　。もっといっぱい踏ん張って　？指入れて中を掻き出してあげるから、うんちを一欠片でも多く出すことだけ考えてね　？行くよ？ズブズブ。あったかくて気持ちいい　。ズブズブ。うんち付いた指も舐めちゃおう。はむ。美味しい　。もっと踏ん張って　？」

私のエールに応えるように、かなこさんは可愛くいきみながら、私にうんちで汚れたお尻をさらに突き出して、出し惜しみすることなくうんちを出して、私に食べさせてくれました。

「ブリブリブリブリュリュリュリュリュリュ。」

「はむ。ジュルジュルジュルジュルゴクンゴクン。ジュルジュルゴクン　。かなこさんのうんちもすごく美味しかったわ　。そろそろ、かなこさんのクリトリスもビンビンになったんじゃないかしら？」

私はかなこさんが突き出したお尻を撫で回しながらアナルにベットリ付いたうんちをクリトリスへと塗り込むようにして、クリトリスの状態を確認しました。かなこさんもどうやら、私がいやらしくうんちを食べていた様子に少なからず興奮したようで、おまんこがヌルヌルになり、クリトリスが膨らんでいました。食べ頃になったのを確認すると、私はお尻を突き出しているかなこさんの股に頭を通すと、うんちを塗りこんだおまんこを丹念に舐めて、おまんこに塗りつけてマン汁で溶けたうんちをすすりながら、クリトリスに刺激を加え、さらにクリトリスが美味しくなるようにビンビンにさせたのでした。

「レロレロジュルジュル。かなこさんのおまんこすごくトロトロしてジューシーになってきたわよ　？、」

「やん　。気持ちいいです　。クリトリス噛み切って食べて欲しいです　。」

自らクリトリスを私の歯にあてがうように腰を振るかなこさんがとても可愛く思えて、私はクリトリスに優しく歯を当ててゆっくりと噛みちぎり、ジューシーなクリトリスを咀嚼し飲み込むと滴る血を舐めすするのでした。

## 第3話（後書き）

気ままに更新します。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n1399kx/

カニバリズムなミカの近況

2025年9月13日02時39分発行